

隅田川散歩 (五) 清洲橋と永代橋

長尾 進一郎

隅田川の起点である北区の岩淵水門から、下流に向けて歩いて来た。一八番目の橋、両国橋から右岸は中央区に、次の新大橋から左岸が江東区に変わる。新大橋の二百メートルほど下流の左岸に芭蕉記念館があり、芭蕉の生涯、俳句、奥の細道などに関する資料が展示されている。大正六年、近くの小名木川合流点付近で芭蕉の愛した石の蛙が出土し、その地が芭蕉稲荷として祀られ、東京府が「芭蕉翁古池の跡」に指定した。芭蕉稲荷横の堤防上には「芭蕉庵史跡展望公園」がある。芭蕉庵が川に近い所にあつたことは、作品からも確かなようだ。

左岸に小名木川が合流すると間もなく清洲橋。関東大震災後の復興事業で架けられた橋の一つで、近代橋梁技術を結集した特殊な吊橋であると共に、姿の優美さも追求された。また隅田川大橋を挟んで二つ下流の永代橋も、日本初の支点間百メートル超の力強い形状の橋だ。震災復興架橋の中でも、これら二橋が代表的な存在であるとの土木学会の説明書きがある。隅田川に架かる橋は、それぞれに特徴があつて見ていて飽きない。

休日のためか、川面を水上バスが頻繁に行き来している。中でも目を引くのがSF映画から抜け出てきたようなヒミコ、エメラルダス、ホタルナの三隻で、漫画・アニメ界の巨匠の松本零士氏が「子供たちが乗りたくなるような船」をコンセプトにデザインしたそうだ。宇宙船をイメージしたシルバー・メタリックの流線形の船体に、曲面ガラスの窓が多数配置され、大人も乗ってみたくなる。

テラスの柵に竿を縛り付けて釣をしている人をよく見かける。ハゼ、ボラ、ウナギなど多くの種類の魚がいるという。高度成長時代の魚も住めなかつた隅田川と較べると、水の色も見違えるようだ。テラスが整備されて川べりを散歩する人々も増え、水上バスも多数運行されている。昭和三〇年頃までの川沿いの賑わいとはまた違って、観光や寛ぎを軸に人々に愛される隅田川が復活してきたことが見て取れ、大変喜ばしいことだ。(つづく)